

呑川の植物レポート「2021年冬季～早春」  
サンシュユ（花木）ノゲシ（野草）、

記：橋本 文興

☆サンシュユ（山茱萸）は早春ウメにつづき黄色い花が咲き見事な花木です。

「サンシュユ」は別名「ハルコガネバナ」、アキサンゴなどと云い朝鮮、中国の原産。日本では古くから庭木として栽培されている。工大橋の地下道上部と大森南一丁目公園に植えられている。

早春、樹全体が黄色い色になるほどに花が咲くサンシュユが見られる。花期2～3月、果熟期11～12月、樹高は2～5m落葉小高木、成長は遅いと云われる。ヤマボウシに似る。葉は狭い長楕円形、花は葉より先に開く、果実はみずみずしく、晩秋に果柄ごと赤く熟す。ミズキ科。花ことば：持続、強健、耐久。



工大橋の山茱萸 3/3撮影



サンシュユの花



サンシュユの実（夏季）



晩秋の実

☆春は福寿草はじめ、菜の花、タンポポなど、黄色い花の野草が多く見られます。

今回は花期の長い黄色い花の野草を取り上げました。呑川の緑道には寒さが厳しいこの時期、野草は地面にへばりつき、葉を広げ春の芽吹きを待っています。この葉の形をロゼットと呼ぶのですが、ロゼットで冬を越すのは越年草の仲間です。タンポポやオオバコもロゼット型です。

「ノボロギク」(野檻樓菊) 道端や畠地に良く見られるヨーロッパ原産の帰化植物です。葉は小さな広線形で不規則に羽状に切れ込み、茎はよく枝分かれしている。黄色い頭花は管状花からなり、舌状花は無い。ほぼ1年中花を咲かせるたくましい一年草。同じキク科には黄色い花を咲かせる種が多い。ちなみにあげるとニガナ、コオニタビラコ、ジシバリ、コウゾリナ、ブタナなど。花が終わった後に出てくる綿毛をぼろ屑にみたてた名前か。キク科、草丈10~30cm、花言葉:一致、相談、合流



ノボロギク



ノゲシ (ロゼット状態)

「ノゲシ」(野罌粟) はロゼットタイプで冬越しの多年草で、呑川沿いで多く見られます。主に春に咲くことから「ハルノゲシ」と呼ばれる。文献ではノゲシの花期は4~7月、直径2cmほどの黄色い花をつける。草丈40~100cm、葉がケシの仲間に似ていることが名前の由来。茎は太く中空で柔らかい。葉にトゲがあるがにぎっても痛くない。葉を切るとゴム成分の白い汁が出る。花言葉:間違いはいや、悠久。

同属でノゲシに似た「オニノゲシ」は草丈50~120cmで大型、葉は堅く光沢があり縁には多数の鋭いトゲをもつなど荒ら敷く見えることからこの名が付いた。「アキノノゲシ」は別属である。明治時代にヨーロッパから日本に入ってきた帰化植物。花期は4~10月と長い。

「オオキバナカタバミ」(大黄花傍食)、1960年代から分布を広げるようになった南アフリカ原産の帰化植物。最近呑川沿いに増殖している。同属のカタバミとよく似ているが、「カタバミ」は地面をはって広がるのに対して本種は葉が地面から生じる根性葉。草丈15~30cm、ハート形の小葉が3枚合わさって出来た葉が密集するように付いている。葉には紫色の小さい斑点が見られる。黄色い花は直径0.8~1.0cmで花弁は5裂。花期は4月~9月と長い。カタバミ科。花言葉:輝く心、決してあなたをすてません。



ハルノゲシ



オオキバナカタバミ

参考図書: 都市の樹木 433 著者 岩崎哲也 発行所 (株)文一総合出版

: 野草図鑑 著者 高橋 修 発行所 (株)ナツメ社